

消えゆく言語を救う

3年1組25番 古川ひろの

1、はじめに

今日、世界では6000～7000語の種類の言葉が話されているが、その半数が消滅の危機に瀕しているといわれている。「ユネスコ世界危機言語アトラス」には2000～3000語の危険度が六段階に分けられまとめられている。初めて見た時は誰もが驚愕する数であろう。実際身の回りの人に見せたところ、全員が驚いたと感想を聞かせてくれた。私はそのような現状を目に、どうして数が増えたのか、どうしてこのような枝分かれが起きたのかを突き詰めたいと考え、そこに着目して考察を広げた。

2、序論

研究に当たって参考にした資料は先行研究である竹尾利夫氏、丸山竜平氏の『漢字の伝来と古代日本語表記』(2007年)と、上野昌之氏の『アイヌ語の衰退と復興に関する一考察』(2011年)である。二つを参考にすると同時に独自に考察することで研究を進めた。また、先行研究である西田直敏氏の『日本人の文字生活史序章』(1998年)の年表を元に時代を区切って整理し過去の事例の原因とそれに対し政府の施行した解決策をリストアップし考察をした。その上で現状にも目を向け、上に倣って案を出した。詳細な手順については下の通りである。

3、本論

まず考えたことは、言語の消失について探るためには由来と現在の状態について見解を深めていくべきであるということだ。上述の竹尾利夫氏、丸山竜平氏の論文中の、「(言語の表記方が伝わるには)優れて政治的な内的成熟と外交的家間の緊張が文字を必要とする段階的發展を持たなければならなかったようである。」という記述と、同じく上述の西田直敏氏の論文で示されている生活に基づいた時代区分をもとに考察を進めた。出した答えは、言語は国外からの受容と国内での発達を繰り返しているということだ。ふたつのサイクルを繰り返すことで言語はより国際化という意味で広がり、深められていく。

そもそも文字としての日本語の起源は二千年前に中国から伝わった金印からと言われている。これが最初の国外からの受容であり国際化であると定義すると、その後五世紀にかけて地名や人名を通して広がり使われるようになったことは、国内での発達の部分だ。また日本で現在も継続して使われている平仮名、片仮名は平安時代に生み出されたが、上述の論文によるとそれらは十分な言語の発達がなされて初めて生み出されたものだと言われている。

これらのサイクルに則ると、私たちがいま生きる現在は、どの段階なのだろうか。さまざまな意見はあると思うが、私は、今は「共通言語の受容」の期間であると答えを出した。文科省によって数年前から小学生から英語の授業が義務化されたことを鑑みるとこれから徐々に英語の文化は浸透していくと予想できる。また、インターネットを通して世界と簡単に繋がることのできる現代であるからこそ、これから急速に共通言語が発達していくと思う。

問題となるのは、これらの発達の裏で同時に進んでいる言語の消失である。国際化が進みだんだんと文化が単一になっていくなかで、ローカルな言語の話者は年々と減少していつか。冒頭に述べたアトラスでも確認できるが、ニュースでも世界で唯一の先住民族の言葉を話す老人が亡くなるというものを見かけることが多くなったように感じる。最近の例で言うと、ブラジルの先住民部族最後の生き残り男性が死亡したニュースである。(2022年8月30日現在。男性がどの言語で生活していたかは明らかになっていないが一つの文化が途絶えたことは確かである。)このニュースを見て世界の人々はどうか考えただろうか。時代を生きのびてきた人々の知恵が込められ

た言語が途絶えることで、次の世代へと受け継ぐ手段がなくなってしまう。これらを食い止め、保存することが現代の私たちの大きな目標の一つになると考えた。

言語の消失については、伝来とは打って変わって、交流が隔絶することから始まる。世代間や、大きな規模で言うと地域でのコミュニケーションで使用されなくなることが原因である。身近な例を取り上げると、祖父母が地域の方言を話しているのに、その子や孫は話さないことだ。しかし、コミュニケーションに使用しないだけで、祖父母や上の世代の人たちが繰り広げている会話は理解はしているという事例が地域の方には多い。私はここに解決の糸口があると焦点を当てた。

ここで私たちの1番身近なアイヌ語を例に取り、解決への道を探る。アイヌ語の歴史を学ぶことは現在日本で義務教育に取り入れられているため、圧倒的に知名度が高いことから選出した。アイヌの言語は、日本政府の旧土人保護法によりわずか20年ほどで消滅の道を進んだ。上野昌之氏の『アイヌ語の衰退と復興に関する一考察』に「社会経済的地位が低い用語を使用するよりも、有力言語の獲得により社会的地位の上昇を期待した。」とあるように、当時の人々は自ら自分の文化を否定し地位上昇のために日本語に乗り換えていった。これらは、あくまで日本政府の排除の目的があったから起こった事例である。しかし、この消滅へと向かわせる事例の逆を行えば、復興へと誘導していくこともできるのではないだろうか。無価値と思い捨ててしまうなら、歴史と知の体系が存在することを説き、継承の価値があるものだと気づいてもらうことが第一歩だ。尊重され受け入れられる社会環境作りには、私たちはどのように関わることができるだろうか。

これからの復興について、アイデアを大きく二つに分けた。一つはメディア、もう一つは教育を通して広げていくものだ。一つ目のメディアについては宣伝を主に行なっていくものだ。現代においてSNSを通して広報活動を行っていくことは最も身近に感じると感じる人は多いのではないだろうか。動画サイトを活用している先例も既にある。YouTubeチャンネルにて個人が手作りで手がけるものなので、生活感や実体感の高いホームビデオのような感覚で楽しむことができる。実際、現役女子大生でアイヌの関根摩耶さんが投稿をしている『しとちゃんねる』をYouTubeで視聴することが可能だ。しかし、知識の乏しいいわば素人が一から始めるとなると、ネットリテラシーや事実とは異なる別の視点からの問題や、より多くの人に知ってもらうための活動の負担が大きいといった課題があるため難しい。また同じ視点で漫画や小説など娯楽と結びつけていく方法もあるが制作の段階で専門的な技術も必要になり、更に人気に左右されるといった難点がある。さらに、娯楽と結びつけるという方法では他にも観光という視点がある。高校で実施されたスタディーツアーで地域の子どもたちから観光スポットのガイドと解説をしてもらったことがある。その経験を通じて、観光は今後失われない事柄であるため、それと復興を結びつけるのは有力な方法だと気づきを得た。これについては観光ガイドという、一定基準を持つての活動なため、最も行いやすく無難だと感じる。

分けたうちの二つ目の教育は、講習会や義務教育などで行われるものである。教育は全国の学生にとって馴染み深いものであるため、始めやすい利点がある。講習会や交流会を行う際にも、オンラインサービスの活躍が期待できる。

Apple社がキーボードにアイヌ語を追加した事例についても触れておきたい。もともとは文字文化がないアイヌ語ではあるが、日本語のカタカナ表記でアイヌ語を表現できるようになった。iOS15のアップデートは革新的だったとみてよいだろう。

しかしながら、ここまでの復興案をあげて、校内発表の際に他の人に意見を求めたところ、「自国の文化や言葉を広げられる相手のメリットはあるが、自分たちに直接関係するメリットが少なすぎる」と指摘を受けた。確かにその通りである。実際に私たちも、自分に対して得が無ければあまり動かない。いくらたくさん解決策を練ったとしても意味が無くなってしまふ。

では、視点を変えてみてはどうだろうか。そもそも上記の復興は廃れそうな文化を再興させる、いわば延命治療のようなものである。それらは断続して行う必要があり、途絶えてしまえば水の泡になってしまう。ここで私が提案するのは、消えゆく言語を教科の古典的な存在として扱う道だ。学校の授業で、既に消えてしまった文化として、それを学習するという新しい視点だ。これには従来の復興よりも、確実に未来まで受け継いでいけるというメリットがある。既に消えてしまった文化や言語を、知識として割り切って教育に組み込むことで、文化の歴史や背景と共に学びこ

れからの改善についても考察し易くなるからだ。消えてしまう未来を受け入れるという結末は、当事者の視点で考えると抵抗したくなる。しかし、文化の存在や特徴や素晴らしさなど知って欲しいことを教育の一環として伝授し受け継いでくれるという点ではメリットである。もちろん、国全体で取り組み教育を改革していかなければいけないという難点があり、実現させるとなれば莫大な時間と費用が必要になる。達成されることはないかもしれないが、これからあるかもしれない一つの未来として受け取って欲しい。

4、結論

これまでの考えを活用して、現代でも効果的に文化を届ける方法を二つ考案した。ひとつは絵本の制作と、もうひとつは学習動画の制作である。どちらも文化の保存と学習の両方の役割を果たし、物として形に残るところがポイントである。また、学習における知識の指導だけでなく、「文化を繋げることの大切さ」も練り込むことで未来へと伝えることができる利点がある。絵本や動画は、クリエイティブな技術が必要となるため、多くの人が制作に関わる。そうすることで、その関わった人にも情報を共有し効果的に伝えることが出来る。この輪もまた文化を広げていくためには大切になってくる。

先述した通りアイヌ語には元来文字がないため不可能であるという意見も出てくるかもしれない。絵本や動画を作るなら文字は必須のように感じられるが、代替として音声やイラストが使用でき、なおかつ五感と繋げて学ぶことが可能なため、より強力な記憶の定着に誘導することができる。

このような点で、文化は衰退していくということを受け入れた上で活動を行うことは、受け入れていない状態での復興よりも、より大きな効果が得られるため推奨する。

5、終わりに

研究による自身の変化について、取るに足らないことばかりではあるが、確かな変化は自分自身の課題解決に持っていき力が育った点だと感じる。論文を書くにあたって、細かく論理的に事柄を進めて行かなければいけなかったことで、物事の繋がりを確認しながら文章を書きプロジェクトを進める力がついたと感じる。これらはこれからの未来、求められている解決を導く時の為の訓練になったと考える。

また、発想を転換する視点を身につけた。復興の構想を練ったが上手くいかず立ち止まっているところに全く方向の違う道を考えることは問題解決の糸口の一つになると感じる。この視点を持って、よりよい生活と社会を心がけていきたい。

6、参考文献・資料

竹尾利夫氏、丸山竜平『漢字の伝来と古代日本語表記』2007年

https://nagoya-wu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1526&file_id=22&file_no=1

西田直敏『日本人の文字生活史序章-漢字の伝来と定着(奈良時代まで)-』1998年

https://konan-wu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=747&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=17

上野昌之『アイヌ語の衰退と復興に関する一考察』2011年

https://saigaku.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=526&item_no=1&attribute_id=73&file_no=1

文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1414533.htm

関根摩耶 しとちゃんねる

<https://youtube.com/channel/UCsvS5QjLwvIVhWpK48L57Cg>

大牟田市立駛馬小学校

<https://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/hayame-es/guide.html>

Appleサポートページ

<https://support.apple.com/ja-jp/guide/japanese-input-method/jpimce21c292/mac>

最終閲覧日...2022/12/02